

『私の気持ち』 作…ポチ子

綾美 「あんた、全然私の気持ち気づいてなかったでしょ。」

謙佑 「うん。」

綾美 「気づいてたとしても、無視できたんでしょ。他の子の時
もそう。あんたのこと好きなのバレバレな子とかいたけ
ど、そんなの無視してきたじゃんか。なのに、あの子の
ことは無視できないって？」

謙佑 「別にそういうわけじゃないけど。」

綾美 「顔か。あの子可愛いから？」

謙佑 「違うよ。永富さんは、その、優しいし……。」

綾美 「優しいって……。私があの子みたいな性格でも、あ
んたは好きになってくれなかったよ。」

謙佑 「そんなの分かんないだろ。」

綾美 「分かる。」

謙佑 「分からない。」

綾美 「分かるもん！絶対そう。」

謙佑 「ええ……。」

綾美 「結局男はあーいう可愛い女が好きなの……。」

謙佑 「え！？なんで泣いてんの。」

綾美 「うるさい！あんたのせいやろ！地獄に落ちてまえ、お前

なんぞ。ほんま、ゆるさへんわ！」

謙佑 「なぜ急に関西弁？」

綾美 「わいの関西の血が騒いどるんや。」

謙佑 「関西の血、入ってたっけ？」

綾美 「うちのおとんのお兄ちゃんのお奥さんが大阪出身なんや。」

謙佑 「それ、入って無くね？」

綾美 「なんやねん、ほんま。こっちはずっとあんたの事好きだ

ったのに。顔が可愛いくらいで他の女になびきやがって。」

謙佑 「だから顔じゃないって……。」

綾美 「言い訳は聞かんわ！」

謙佑 「まだ続けるのエセ関西弁。」

綾美 「私の方が、ずっとずっと好きなのに。私の方が絶

対好きだもん。ううううう。」

謙佑 「分かった、分かったから泣かないでよ。」

【謙佑、綾美の涙を拭う】

綾美 「触るなあああ。好きでもないくせに、涙なんか拭ってん

じゃないよ。浮気だって永富さんに言ってやるううう。」

謙佑 「それはちょっとやめて。」

綾美 「けんちゃんの馬鹿ああ。大っ嫌いいいい。」

謙佑 「はいはい、分かった分かった。」

綾美 「人でなしいいいい、サイコパス野郎ううう、チビいいいい、
眉毛ゲジゲジいい。」

謙佑 「うん、そうだね。」

綾美 「好きだったああ、ほんとに好きだったんだもん。うう
うう。」

謙佑 「・・・うん、ごめん。」

綾美 「謝んな、ばかああああ。」

謙佑 「ごめんって、・・・ほんと、ごめん。」

— 終わり —